

廣池千九郎における正義と慈悲 I

—— 先行研究の整理と評価／正義と慈悲総論① ——

竹 中 信 介

目 次

1. はじめに
2. 先行研究の整理と評価
3. 正義と慈悲総論①
4. おわりに

1. はじめに

法学博士・廣池千九郎（1866-1938）が、自身のこれまでの研究の集大成、そしてモラロジー（Morality）を確立するための最初の試みとして世に問うた『道徳科学の論文』の第14章第5項において、「正義（justice）」と「慈悲（benevolence）」は、「最高道徳の基礎的観念の第一」に位置づけられており¹⁾、この2つの概念に、非常に重要な意味が付与されていることがわかる。

後ほど詳しく見ていくように、廣池は自身の専門領域である法律学（特に東洋法制史）の研究において発見した正義の精神と、日本皇室・聖人研究において発見した慈悲の精神の調和をいかに図るのか、という問題意識を持っていた。『道徳科学の論文』第14章第5項の冒頭部分では、「最高道徳の実行とは実にこの慈悲と正義との両者を適当に調和し、且つ適当なる方法によって、これを人間社会に実現することにあるのです。」²⁾とまで言い切っている。しかも、この問題が、モラロジー研究の端緒において投げかけられた課題でありかつ、後述するように最終的には後進に託された課題の1つでもあったことには、幾重にも注意しておかなければならない。

現在の公益財団法人モラロジー研究所においても、正義と慈悲の問題は、継続的に扱われている。例えば、生涯学習講座等で使用されている『改訂 テキスト モラロジー概論』³⁾第2部「実践編」第6章のタイトルはまさしく、「正義と慈悲」である。そこでは、

1) 廣池（1928/1985）、50-132頁。

2) 廣池（1928/1985）、51頁。

3) なお、このテキスト版は、『総合人間学モラロジー概論』（モラロジー研究所編、2007）をベースに、各種講座で使用しやすいように編集されたものである。

モラロジーの正義と慈悲の考え方の基礎が押さえられたうえで、現代の諸問題を想定した実践について説明がなされている⁴⁾。

さらに現代の社会情勢上、正義⁵⁾と慈悲⁶⁾の調和⁷⁾という課題は、ますます必要性を帯びてきていると考えられる。身近な人間関係⁸⁾から、地域社会、会社組織、国際社会、地球環境問題⁹⁾まで、様々な場面で正義と慈悲の調和という課題が問われている。そういった現代社会の状況下で、廣池が掲げた「正義の実現を目的として自己の慈悲〈犠牲〉を方法とす」¹⁰⁾という最高道徳の理想は、果たしていかなる意味を持ち、いかなる効果をもたらすのか。

また、近年では、国境を越える正義¹¹⁾、世代を越える正義（世代間正義）¹²⁾そして、世代間倫理¹³⁾（あるいは継世代倫理¹⁴⁾）や未来世代への責任¹⁵⁾といった論点が問題になっているが、廣池の道徳理論は、そのような問題に応答することができるのだろうか。そこに廣池の言う「宇宙的正義（universal justice）」¹⁶⁾あるいは「伝統の原理」¹⁷⁾は関連してくるのかどうか。

本研究では、以上のような現代的な諸問題に注意を払いつつも、当面は原典を読み解く作業を中心に進めていくことにする。廣池千九郎さらにはモラロジーにおける正義と慈悲は、いかなる経緯を辿り生じてきたのか、またそれらは個々にどのような意味を持ち、さらに、それらの調和はいかに図られるのかを探っていく。そのうえで、廣池そしてモラロジーにおける正義と慈悲が現代においていかなる意味を有するのかを検討していきたい。

4) モラロジー研究所編（2009/2015）、83-100頁。

5) 現代の正義論については、Rawls（1971/1999）以降、最近まで様々な議論がある。ロールズ（John Bordley Rawls, 1921-2002）の正義論の影響を受けて「正義」について考察したものとしては、リバタリアニズムの立場から Nozick（1974）、コミュニタリアニズムの立場から Sandel（2005, 2009）が著名である。また、ロールズとサンデル（Michael J. Sandel）両者の理論を詳細に検討し一定程度評価したうえで、彼らの不十分な点に鋭く切り込んだものとして、伊東（2012/2013）がある。他にも正義論について最新のものでは、神島（2018）があるが、そこでもロールズやサンデル、ノージック（Robert Nozick, 1938-2002）の正義論に言及されている。

6) 現代の慈悲論については、中村（1949/1956/2010）やダライ・ラマ14世（2004）などがある。その関連で、犬飼（2016）は、中村元（1912-1999）やダライ・ラマ14世が述べる仏教のほかに、現代のイスラムやキリスト教における「利他」や「慈悲」を取り上げ、比較文明論・比較宗教論的考察をおこなっている。そこでは同時に廣池の利他思想にも言及がなされ、本稿の文脈上も興味を引く。

7) 哲学や倫理学の領域では、「正義の倫理」を補完する「ケアの倫理」に注目が集まっている（Gilligan, 1982、品川、2007、2016など）が、本稿でも、その文脈からの廣池における正義と慈悲へのアプローチに着目する（水野、2011、Mizuno, 2013、竹内、2013など）。

8) 筆者は、道徳科学研究センターの2018年度「研究センターゼミ」において、アリストテレス（Aristotélēs, 前384-前322）の『ニコマコス倫理学』における「正義（δικαιοσύνη ディカイオシュネー）」と「愛（φιλία フィリア）」を手がかりに、その現代的な展開について考察をおこなった。そこでは、正義と愛に含まれる、人間関係を調和させ、秩序をもたらす役割について論じた。

9) この地球環境問題に関連して、廣池千九郎の自然観に内在する、自然環境（草や木）に対する仁や慈悲という性格をめぐっては、竹中（2019）を参照。その論点は、本研究で扱う廣池の慈悲論にも通じるところであるため、次稿以降でも適宜、参照できればと思う。

10) 廣池（1928/1985）、112頁。

11) Tan（2004）、Caney（2005）、井上（2012）、日本法哲学会編（2013）など。

12) Sarat ed.（2014）、Tremmel（2009/2014）など。

13) Frechette（1981）、加藤（1991）など。

14) 竹中（2018）。

15) Jonas（1979/2003, 1984）、服部（2013）、服部編著（2015）など。

16) 廣池（1928/1985）、69頁。人間的もしくは社会的正義と対比される概念。

17) 廣池（1928/1986a）、第二版の自序文31頁。

本稿では、その I として、①先行研究の整理と評価、②正義と慈悲総論（特に正義と慈悲の淵源を探る）を中心に見ていこうと思う。なお、その II 以後は、正義と慈悲総論の続きの議論を終えたあと、③正義論、④慈悲論、⑤正義と慈悲の調和、⑥正義と慈悲の現代の展開という順番に進めていく予定である。

2. 先行研究の整理と評価

まず、廣池千九郎及びモラロジー研究史上において、正義と慈悲に焦点が当てられた先行研究を整理し、若干の評価をおこなう。

本稿では、廣池及びモラロジー研究の主要論文が掲載されている『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』（1966、以下『記念論文集』）、『生誕百年 廣池博士記念論集』（初版 1967、増補版 1973、以下『記念論集』）、『モラロジー研究』（1973 創刊）、『モラロジー創建 50 年記念学術論文集』（1976、以下『学術論文集』）、『道徳・教育・経済』（1983）、『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』（1989、以下『廣池千九郎とモラロジー』）、『2002 年モラルサイエンス国際会議報告』（2005）、『2009 年モラルサイエンス国際会議報告』（2011）を主な参考文献とし、それぞれの論文において、正義と慈悲にどのようにアプローチされているのかを検討する¹⁸⁾。

『記念論文集』（1966）

大塚真三（1919-1995）の「〈道徳科学の論文〉第 1 巻第 14 章にみられる廣池千九郎博士の人間観」では、「人間の本性は正義、あるいは善である」という廣池の人間観に言及されている。他にも、椿原三郎の「廣池千九郎博士の人心開発救済についての考え方—『概要』から『論文』へ」、内藤幹治の「知徳一体論についての一考察」、水野治太郎の「廣池博士の科学思想—学問観と方法の特色」などにおいて、正義と慈悲、さらには慈悲寛大自己反省の語が散見され、廣池の『東洋法制史序論』以後の原典や『道徳科学の論文』におけるそれらの語の位置づけを確認することができる。

しかしながら、この時期（1966 年）の研究段階では、後で言及するような正義と慈悲の関係性（相補性）や調和という視点からの考察は見受けられず、廣池の正義と慈悲の概念をめぐって、個々に取り上げる形で議論されるにとどまっていることには注意しておく必要がある。

『記念論集』（初版 1967、増補版 1973）

廣池の正義と慈悲への言及については、以下の 3 つの論文が目される。

まず、東洋法制史が専門で法学博士の内田智雄（1905-1989）が「廣池博士の思想における「東洋法制史序論」の意義」の一部において「正義 (justice)」の語に触れ、また本

18) ここに挙げた参考文献の選択については、橋本（2015）によるところが大きい。なお、「廣池」及び「廣池」の表記については、引用文の場合、原文の表記をそのまま使用し、筆者の地の文では「廣池」を使用する。

稿でも後で論じる「衡平法 (equity)」について説明している。

次に、憲法・法哲学が専門の三瀧信吾 (1916-2003) の「『日本憲法淵源論』の意義とその体系について」と、神道が専門の高原美忠 (1892-1989) の「『伊勢神宮と我国体』について—特に国体の淵源に関する広池博士の説」¹⁹⁾において、「慈悲寛大自己反省」について詳細に論じられている。

ここで挙げられている「東洋法制史研究」と「慈悲寛大自己反省」については、後ほど詳しく取り上げる。

『モラロジー研究』(1973～継続発刊中)

廣池の正義と慈悲に個々の文脈で言及されているものは複数あるが、主題としたものは、それほど多くない。主要なものを以下に挙げる。

No. 17

青山治城²⁰⁾ (1984) 「正義と慈悲」

本論文では基本的に、一般的な正義論、慈悲論の研究が中心となっており、廣池における正義と慈悲の問題は主題になっていないが、注において「法学博士広池千九郎は正義と慈悲との関係について一層の研究が必要であることを示唆している(『道徳科学の論文』1、昭和3年、140頁)が、その要請に答えることはなお今後の課題である。」²¹⁾と言及されていることには、着目しておく必要がある。

なお、ここで引用されている『道徳科学の論文』は、旧版9冊本の第1冊であるが、その140頁にはこう書かれている。「(22) 法律學の原理 (正義) と諸聖人の精神 (慈悲) との調和及び其應用に關する具體的方法の研究」²²⁾これは、「1. はじめに」でも言及したが、廣池が後進に託した「将来モラロジー研究所において引続き研究を必要とする諸項目」²³⁾の1つである。

以下で見ていくように、この研究の系譜は水野治太郎が継いでいるように思われる。ただし、その研究(及び実践)領域は廣池が示したような法律学や聖人研究だけにとどまらず、現代の人間学やケア論の文脈に拡張されていく。前者の領域における正義論と慈悲論についての考察は、水野(2008)で集大成されたとみられる。後者の領域における慈悲論については、水野(1991)が代表的である。正義と慈悲の調和については、以下で取り上げる水野(2011)とMizuno(2013)が体系的である。

ここで取り上げた青山論文では、廣池の正義と慈悲が主眼にはなっていないものの、正義と慈悲の連関について意識的に考察していることは、(廣池本人を除く)モラロジー研

19) 本論文の「五 私の見た広池先生」(高原、1967/1973、439-440頁)では、高原自身が明治45年(1912)に神宮皇学館に入学して接したときの廣池千九郎や、モラロジー研究所、『道徳科学の論文』に触れられている。

20) 現在、神田外国語大学国際コミュニケーション学科教授。専門は法哲学、社会システム理論。法学博士。

21) 青山(1984)、71頁。

22) 廣池(1928/1980)、140頁。

23) 廣池(1928/1986a)、緒言129頁。

究史上、先駆的な視角であったと言えるだろう。廣池自身の基本的立場もこれと同様で、正義と慈悲の連関性、そして相補性という視点が一貫して見られるのである。筆者はその意味で、青山論文を正義と慈悲研究における1つのメルクマール（指標）と捉える次第である。

No. 26

ロバート・ボール（1988）「モラロジーとイギリスの衡平法体系」

『廣池千九郎とモラロジー』（1989）に同論文が収録（再録）されているため、後ほど詳しく検討する。

No. 70

Higgins-D'Alessandro, Ann (2013) 'Justice and Benevolence: A Westerner's Perspective on the Views of Chikuro Hiroike and Lawrence Kohlberg'

本論文は、2009年の第2回モラルサイエンス国際会議でアン・ヒギンズ・ダレサンドゥロによって報告されたものである。内容については、後ほど日本語版を基に検討する。

Mizuno, Jitaro (2013) 'Care and Justice Counterpoised: The Key to Realizing Benevolence in the Public World'

同じく2009年の第2回モラルサイエンス国際会議で水野治太郎によって報告された日本語原稿の英訳版（訳：水野修次郎）で、内容については、後ほど日本語版にて言及する。

No. 71

竹内啓二（2013）「モラロジーとケアの倫理—正義、慈悲、ケア」

モラロジーそして最高道徳における正義と慈悲の理論を整理したうえで、現代の倫理学や道徳論との比較を試み、正義の倫理とケアの倫理の相互補完的な関係を強調している。基本的な立場は、水野（2011）と Mizuno（2013）を踏襲するものであると考えられる。

『学術論文集』（1976）

個々の論文で廣池の正義と慈悲に言及されているものの、主題とした論文は無い。

『道徳・教育・経済』（1983）

同じく、個々の論文で廣池の正義と慈悲に言及されているものの、主題とした論文は無い。

『廣池千九郎とモラロジー』（1989）

まず、阿南成^{あなんせいいち}²⁴⁾「法と道徳—モラロジーの現代適応のために—」の第1章では、比較

的詳しく廣池の正義論が考察されている。阿南は廣池の正義論を理解するためのキーワードとして、①宇宙的正義、②社会的正義、③正義と慈悲の3つを挙げている²⁵⁾。本論文の具体的な内容については、稿を改めて、正義論の考察の際に再び詳しく参照したい。

次に、ロバート・ボール (Robert E. Ball, 1911-1990)²⁶⁾の「モラロジーとイギリスの衡平法体系」は、イギリスの衡平法 (equity)²⁷⁾の諸原理が、モラロジーにおける正義と慈悲のみならず、その他の最高道德の諸原理 (権利と義務の議論や伝統、人心開発救済、因果律など) とどの程度合致するのか、原理から実践レベルまで詳細に検討されている論文である²⁸⁾。初出はいまから遡ること約30年前であるが²⁹⁾、2019年現在でも非常に重要な位置づけにあると考えられる。否、むしろ現在だからこそ、その重要性がより増しているのではないかと考える。そう考える理由は、以下のとおりである。

筆者の問題意識に引き寄せて言えば、ボール論文は、普遍性を重んじる法的正義では対処しきれない、文脈性や個性を考えるうえで重要であると考え。その関連で、ボールは本論文の結論部分で、「衡平法は、数世紀にわたり、具体的ケースを扱うという純粋に実用的な経験の中から発展してきたものであり、明確に西洋的な色彩をもった道德によって統括されており、普遍性を主張するとか、究極目標を掲げるということはしていない。」³⁰⁾と述べているが、このような指摘は、現代においては西洋のみならず日本においても、そのまま当てはまるのではないだろうか。

さらに、このことは現代的なモラロジーの展開において、幾重にも注意をめぐらせておくべき最重要課題の1つであり、達成が望まれる大きな目標でもあると筆者は考える。聖人の教説・事蹟に一貫する最高道德と、それに合致する現代諸科学、という二本柱の大きな「普遍性」を主として追求してきたモラロジーがいま直面しているのは、日常の「生活世界 (Lebenswelt)」に生きる市井の人々の人生を構成している小さな「個別性」である、と筆者は捉えている。

なお、ボール論文の訳者である立木教夫も指摘しているとおり、衡平法については廣池千九郎自身も『東洋法制史序論』(明治38年[1905])の第七章「中國に於て人爲法律の闕點を救済する方法」において詳しく論じている。そこでは、中国法における衡平法の考察にとどまらず、古代ローマ法や、英国・米国の衡平法 (equity) との比較法学的な視点から検討がなされている。その議論の中心部分において、中国法における衡平法は、古代ローマ法とは「其組織を異にすれど、立法の精神に於ては頗る相似たる所ありと云ふを得

24) 1924年生。元南山大学社会倫理研究所所長・教授。法学博士 (以上、『廣池千九郎とモラロジー』巻末「執筆者一覧」を参照)。

25) 阿南 (1989)、147頁。

26) 元英国高等法院大法官府主事 (『廣池千九郎とモラロジー』巻末「執筆者一覧」を参照)。

27) 道德的規準から一般法 (general law) を制御するシステムとして発展してきた法 (ボール、1989、449頁)。

28) なお、ボール (2019) では、最高道德の解釈論について詳しく展開されているので、ボールの主張を理解するうえでの助けとなる。本論文の (下) については、『モラロジー研究』No. 83に掲載予定 (ボール、2019、80頁、監訳者・北川治男の〈付記〉による)。

29) 初出は1988年発行の『モラロジー研究』No. 26。

30) ボール (1989)、468頁。

31) 廣池 (1905/1983)、158頁。

べきものなるが如し。』³¹⁾と述べられている。

ボール論文と廣池の『東洋法制史序論』の具体的な検討³²⁾とも併せて、「衡平法」については機会を改めて論じたい³³⁾。

『2002年モラルサイエンス国際会議報告』(2005)

大野正英(2005)「自我没却の原理と正義及び慈悲の原理」

『道徳科学の論文』における正義と慈悲の関係性を整理したうえで、実際の人間社会では「自我」が問題になることが多いため、自我没却の原理の必要性を浮き彫りにしている。

この大野論文から得られる着想は、正義と慈悲という最高道徳の基礎的観念が、他の最高道徳の原理といかに関わるのか、という視点である。大野が中心的に取り上げた「自我没却の原理」の他にも、神の原理、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開発もしくは救済の原理と、正義と慈悲は密接な関係にあると考えられる。

本稿では後ほど、廣池の東洋法制史研究における2つの到達点である、正義への着眼と義務先行説の胎動について論じる。

『2009年モラルサイエンス国際会議報告』(2011)

アン・ヒギンズ - グレサンドゥロ(2011)「正義と慈悲—廣池とコールバーグの道徳論に関する一西欧人の見解」

本論文では、道徳性発達理論の提唱者で心理学者であったコールバーグ(Lawrence Kohlberg, 1927-1987)のもとで研究した経歴を持つ心理学者のヒギンズ(Ann Higgins-D'Alessandro)が、廣池とコールバーグの道徳理論の比較研究の切り口として、「正義と慈悲」を手がかりとしている。「七 要約」では以下のように述べられている。

二人の研究者は、成熟した道徳を、正義と慈悲が一体となったものと説明しています。廣池にとって、道徳の第一義的なものは慈悲です。慈悲は、あらゆる道徳的決定や判断、そしてそこから出てくる行為の根底にあって、それらを満たすものです。コールバーグにとっては、正義が第一義的なもので、すべてのレベルで他者との共感もしくは他者への関心によって活性化されます。しかし、最も高次のレベルにおいては、道徳的観点ということで明らかなように、慈悲が正義を完全なものにするということができます³⁴⁾。

このように、廣池とコールバーグそれぞれの道徳理論の特色を総括している。筆者もこ

32) 『東洋法制史序論』の特色と学説史上の意義については、久禮(2016)が特に「法=ノリ」に焦点を当てて詳しく考察している。

33) 『東洋法制史序論』における衡平法については、内田(1967/1973)、311-313頁に詳しい解説がある。

34) ヒギンズ(2011)、183-184頁。

のような説明に基本的には同意するところであるが、廣池にとって道徳の「第一義的なもの」が「慈悲」³⁵⁾であったかどうかは検討の余地がある。本稿では後ほど、廣池の法律学（特に東洋法制史研究）の到達点、そして道徳科学（モラロジー）研究の出発点に「正義」があったことに着目したうえで、「慈悲」との関係に迫っていきたい。

なお、ヒギンズ論文の副題には、「一西欧人の見解」と記されているが、西欧の研究者が廣池の正義と慈悲にアプローチしたものとしては、現在までのところ最も体系的な論文であると見られる。

水野治太郎（2011）「正義を補完するケア・ケアを補完する正義—公共世界における慈悲実現の課題」

廣池が提示した「正義」と「慈悲」が相互補完関係にあると捉えられ、そのような関係性が、実際のケアの現場ではどのように現れるのか、事例を挙げながら説明されている。

さて、以上で先行研究の整理と評価を終えるが、そこから見えてきたことは、それぞれの論者が正義と慈悲のどちらかに重点あるいは軸足を置いて議論を展開している、ということである。

例えば阿南（1989）やボール（1989）の専門とする法学の分野では、「正義」を軸足に議論されることが多いことが分かる。また水野（2011）や竹内（2013）の専門とする人間学やケア論では、「慈悲」の側に軸足を置いた議論が主流になっているとみられる。

その意味では、当初、法学研究から出発し、人間学・ケア論に進んだ経緯を持つ水野治太郎のような研究者（実践者）は、正義と慈悲の両方に軸足を置いてきたと言え、そのような研究的（実践的）バランス感覚は注目に値し、参照するべきところは多いと考える。

しかし、一方ではそれ以外の論者も、正義と慈悲の調和、あるいは相互補完的な関係を何らかの形で意識して論じているのも確かである。そして、そのような問題意識は、廣池における正義と慈悲を研究するうえで、1つの軸になるのではないかと筆者は考えるのだが、その軸を明示しメルクマールとなった研究が、青山（1984）であったということは、先に指摘したとおりである。

以上を踏まえたうえで、廣池の原典を具体的に読み解いていこうと思う。

3. 正義と慈悲総論①（特に正義と慈悲の淵源を探る）

(1) 東洋法制史研究の到達点としての正義と義務先行説の胎動

廣池は、『道徳科学の論文』の第1章第4項を上、中、下に分けて、道徳科学の研究を思い立った動機と理由についてかなり詳細に論じているが³⁶⁾、まず、そこでの「正義」の位置づけを確認したい。

35) 'For Hiroike, morality is primarily benevolence.' (Higgins, 2013, p. 31.)

36) 『新版 道徳科学の論文 第一冊』の本文17～55頁の総計39頁に及ぶ。

師である穂積陳重（1855-1926）の懇篤な指導によって「中国法制」の研究の一部を発表し、国内外の専門学者からの注目を浴びることになり、法律学の進歩に貢献することになった自身の法学博士の学位取得の経緯を振り返りつつ、東洋法制史研究の到達点について、廣池は次のように述べている。

かくのごとき学問上の経歴を有する私の第一に中国の法制を研究して得たところは、その立法の基礎的觀念が、やはりローマ法及びイギリス法などと同じく、正義（*justium*³⁷、Justice）にあるを明らかにしたということ、これでありませ³⁸。

ここで注目すべきは、「基礎的觀念」という言葉である。本稿の冒頭で示したとおり、最高道徳の基礎的觀念の第一が正義及び慈悲であることから、法律学の研究から最高道徳の研究まで、廣池が一貫して「正義」に注意を向けてきたことがわかる。

それでは、なぜ、廣池は専門の「法律学」から、「道徳科学」の研究へシフトしたのか。この点は疑問を持ってしかるべきであろう。それを解く鍵は、「大正元年の大患」³⁹という廣池の人生上の転機も大いに関係すると考えられるが、ここでは東洋法制史研究におけるもう1つの到達点から、その疑問を解消してみたい。つまり、廣池は次のような発見をしたのである。

これと同時に、私は中国の法律の目的は個人の権利を保護するよりは個人の義務を奨励するにあることを知ったのです。すなわち後章（第十四章第六項）に掲げたる義務先行説の意味を味わい得たのであります⁴⁰。

このように「義務先行説」の意味を味わい得た廣池は、次のように考えるに至った。

そこで私は世界人類の進歩に貢献するために、法律学の研究をさせていただくことも必要ではあれど、この上に道徳実行の効果を証明する純科学的研究をさせていただいたならば、世界に向かって更に大なる貢献となるであろうと考え付いたのであります⁴¹。

ここで重要なのは、「道徳実行の効果を証明する純科学的研究」が、世界への更なる貢献につながるかと考えるようになった、廣池の研究態度の変化である。道徳科学（モラロジ

37) ラテン語で「正義」を意味する *Justitia*、もしくは「正しい、公正な、正義の」(*just*) を意味する *Justum* の誤りか。なお、『道徳科学の論文』（第2版底本）の英訳版の該当箇所では、'In my study of Chinese law I first discovered that the fundamental idea of Chinese legislation was *justitia*, or justice, as in the case of Roman and English law.' (Hiroike, 1928/1934/2002, p. 68) と書かれており、'*justitia*' の語が使われていることが確認できる。

38) 廣池（1928/1986a）、18頁。

39) 井出（1995）、92頁。

40) 廣池（1928/1986a）、18頁。

41) 廣池（1928/1986a）、18頁。

一) 研究の使命が、**道徳**実行の効果を明らかにし、人々に(最高) **道徳**の実行を勧めていくことであったことに鑑みると、廣池が**東洋法制史**研究によって「正義」という**立法上**の基礎的観念のみならず、義務の先行の**道徳的意味**を看取したことは、後の最高道徳体系の形成上、非常に重大な出来事であったと言える。

さらに、この義務の先行が、最高道徳の基礎的観念の第二に位置づけられていることを確認しておかなければならない。『道徳科学の論文』第14章第6項の項目名は「最高道徳における基礎的観念の第二は人間の人格及び権利発生の原因をもって義務の先行に帰するにあり」⁴²⁾である。

以上から明らかになったように、廣池は「東洋法制史研究」によって、後に形成される最高道徳の体系上、主要な観念である「正義」と「義務先行」という2つの軸を手に入れたのであった。その意味で、かつて下程勇吉(1904-1998)が廣池の東洋法制史研究を「最高道徳的地平への前奏曲」⁴³⁾と位置づけたのは、まさに明晰であったと言う他ない⁴⁴⁾。

(2) 慈悲研究への沈潜を促した日本皇室研究と廣池の身体上及び精神上の体験

それでは、一方の慈悲への着目の経緯を明らかにしてみたい。まず注目されるのは、日本皇室の万世一系の原因を探っていくと、「天照大神の御聖徳すなわちその**最高道徳**」に基づくことを発見し、道徳研究の必要性を深く感じるようになった廣池自身の**研究上**の体験である⁴⁵⁾。そして廣池が、この「天照大神の御聖徳すなわちその**最高道徳**」の核的内容を「慈悲寛大自己反省」⁴⁶⁾と**表現したことは、よく知られている**。

さらに重要なのは、廣池の**身体上及び精神上**の体験に関する次の一文である。

私は明治四十二年(一九〇九年)ごろより積年の苦学が健康を害して神経衰弱に陥りました。これが一つの動機となって私はその後しきりに心を宗教に傾け、一視同仁の神の御心たる慈悲(benevolence)の心を体得し、大いに犠牲の観念を養い、何事も自己反省して、つとめて精神を平和にする方針を立てたのです⁴⁷⁾。

このような廣池自身による回顧的論述は、廣池の**事跡研究上**、これまで幾度も注目されてきた重要な部分であるが、それに加えて、最高道徳の基礎的観念の第一を構成する「慈悲(benevolence)」の精神、さらには最高道徳実行上の精神的指針となる「犠牲の観念」、

42) 廣池(1928/1985)、132頁。

43) 下程(1985/1996/2005)、23頁。

44) この関連で、『東洋法制史序論』の学問上・方法論上の位置づけと、その『道徳科学の論文』に与えた影響について、松村(1997)が詳しく考察している。

45) 廣池(1928/1986a)、19頁。

46) 「最高道徳実行の第一根本精神」と規定されている(廣池、1928/1986b、289頁)。

47) 廣池(1928/1986a)、19頁。

48) 明治42年(1909)前後の廣池の事跡、「慈悲寛大自己反省」の成立過程、「モラロジーの建設」への経緯については、下程(1985/1996/2005)、立木(1994、2000、2011)、井出(1995、1998/2009、2011)、所(2011、2013)、松浦(2015)、橋本(2016)などによって詳しく知ることができる。なお、所(2013)の書評・図書紹介については拙稿の参照を乞う。その中でも廣池の「慈悲寛大自己反省」に触れている(竹中、2014、190頁)。

そして「自己反省」という道徳的標準を確立したことを考えると、廣池の思想研究、そしてモラロジーの研究上も見逃せない重大な言明である⁴⁸⁾。

4. おわりに

本稿では、廣池千九郎における正義と慈悲についての先行研究の整理と評価、正義と慈悲の総論として、特に正義と慈悲の淵源を探るところまでを終えた。ここまでの内容を以下にまとめて、今後の課題に言及しておきたい。

先行研究を見渡せばわかるように、廣池の正義と慈悲という概念は、相互補完的に、あるいは調和的に捉えていこうとするのが、研究方法として適当だと言えるだろう。しかしながら、本稿の後半部分で明らかにしたように、正義と慈悲の淵源するところは、別々にあるということも、見逃すべきではない。すなわち、廣池の正義の研究は法律学（特に東洋法制史）に、慈悲の研究は日本皇室・聖人研究にそれぞれ端を発する、ということに注意しておくべきであるのだ。

よって、今後の研究の進め方としては、初めから正義と慈悲を関連させて検討するのではなく、正義と慈悲を個別に、廣池自身の説明を追う、という方法を取りたいと思う。

したがって次稿以降、引き続き、廣池の正義と慈悲の総論を検討したうえで、正義と慈悲の各論、そして現代の諸問題へと進んでいきたい。

参考文献一覧

和文

- 青山治城 (1984)「正義と慈悲」『モラロジー研究』No. 17、モラロジー研究所、55-76 頁。
- 阿南成一 (1989)「法と道徳—モラロジーの現代適応のために」『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』、モラロジー研究所編、広池学園出版部、145-167 頁。
- 井出元 (1995)『人生の転機—廣池千九郎の生涯』、モラロジー研究所。
- 井出元 (1998/2009)『廣池千九郎の思想と生涯』、モラロジー研究所 (オンデマンド版)。
- 井出元 (2011)「モラロジー研究の成果としての廣池千九郎著『道徳科学の論文』」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、125-145 頁。
- 伊東俊太郎 (2012/2013)「公共」とは何か」『変容の時代—科学・自然・倫理・公共』、麗澤大学出版会、90-129 頁。
- 犬飼孝夫 (2016)「利他の文明論—道徳の科学的研究とグローバルな倫理の構築に向けて」『モラロジー研究』No. 78、モラロジー研究所、65-82 頁。
- 井上達夫 (2012)『世界正義論』、筑摩書房 (筑摩選書)。
- 内田智雄 (1967/1973)「廣池博士の思想における「東洋法制史序論」の意義」『生誕百年 廣池博士記念論集 増補版』、内田智雄編、広池学園事業部、291-334 頁。
- 大塚真三 (1966)「道徳科学の論文」第 1 巻第 14 章にみられる廣池千九郎博士の人間観」『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』、道徳科学研究所研究部編、道徳科学研究所、本文 1-46 頁。
- 大野正英 (2005)「自我没却の原理と正義及び慈悲の原理」『グローバル時代のコモモンラリティの探求—二〇〇二年モラルサイエンス国際会議報告』、モラロジー研究所道徳科学研究センター編集・発行、180-204 頁。

- 加藤尚武 (1991)『環境倫理学のすすめ』、丸善株式会社 (丸善ライブラリー)。
- 神島裕子 (2018)『正義とは何か—現代政治哲学の6つの視点』、中央公論新社 (中公新書)。
- 久禮旦雄 (2016)「廣池千九郎『東洋法制史序論』の特色と学説史上の意義—「法=ノリ」論を中心として」『モラロジー研究』No. 78、モラロジー研究所、21-44頁。
- 下程勇吉 (1985/1996/2005)「普遍道徳の開拓者 廣池千九郎」『廣池千九郎の人間学的研究』、モラロジー研究所出版部、9-96頁。
- 品川哲彦 (2007)『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版。
- 品川哲彦 (2007)「ケア関係の構造分析」『モラロジー研究』No. 78、モラロジー研究所、1-19頁。
- 高原美忠 (1967/1973)「『伊勢神宮と我国体』について—特に国体の淵源に関する廣池博士の説」『生誕百年 廣池博士記念論集 増補版』、内田智雄編、廣池学園事業部、415-440頁。
- 竹内啓二 (2013)「モラロジーとケアの倫理—正義、慈悲、ケア」『モラロジー研究』No. 71、モラロジー研究所、ヨコ組 75-88頁。
- 竹中信介 (2014)「書評・図書紹介 所功著『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』」『モラロジー研究』No. 73、モラロジー研究所、189-195頁。
- 竹中信介 (2018)「『世代間倫理』から『継世代倫理』へ—比較文明学・人間学・モラロジーの視点から—」『麗澤大学大学院 平成29年度 博士論文』、言語教育研究科比較文明文化専攻 (2018年3月受理)。
- 竹内信介 (2019)「廣池千九郎の自然観とその現代的意義—科学と宗教の対話、そして調和へ」『モラロジー研究』No. 82、モラロジー研究所、39-61頁。
- 立木教夫 (1994)「廣池千九郎博士と矢納幸吉会長—出会いの前後の事蹟とその意義について」『モラロジー研究』No. 40、モラロジー研究所、35-60頁。
- 立木教夫 (2000)「『廣池千九郎日記』研究「知識」と「信仰」をいかに調和させるか—明治四十四年における天理教教理研究に基づく実地教育の事蹟—」『モラロジー研究』No. 47、モラロジー研究所、31-68頁。
- 立木教夫 (2011)「廣池千九郎の道徳的体験—『道徳科学の論文』の執筆決定をめぐる伝記的研究」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、108-124頁。
- ダライ・ラマ14世テンジン・ギャツォ (2004)『ダライ・ラマ慈悲の力 来日講演集』マリア・リンチェン訳、春秋社。
- 椿原三郎 (1966)「廣池千九郎博士の人心開発救済についての考え方—『概要』から『論文』へ」『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』、道徳科学研究所研究部編、道徳科学研究所、本文 213-264頁。
- 所功 (2011)「廣池千九郎博士の“万世一系”最高道徳論の再検討」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、200-229頁。
- 所功 (2013)『お伊勢さんの式年遷宮と廣池千九郎』、モラロジー研究所。
- 内藤幹治 (1966)「知徳一体についての考察」『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』、道徳科学研究所研究部編、道徳科学研究所、本文 265-278頁。
- 中村元 (1949/1956/2010)『慈悲』、講談社 (講談社学術文庫)。
- 日本法哲学会 (2013)『国境を越える正義 その原理と制度—法哲学年報 (2012)』、有斐閣。
- 橋本富太郎 (2015)「廣池千九郎をめぐる神道学的研究緒論 (二)—研究史前篇」『モラロジー研究』No. 74、モラロジー研究所、35-56頁。
- 橋本富太郎 (2016)『廣池千九郎—道徳科学とは何ぞや』、ミネルヴァ書房。
- 服部英二 (2013)『未来を創る地球倫理—いのちの輝き・こころの世紀へ』、モラロジー研究所。
- 服部英二編著 (2015)『未来世代の権利—地球倫理の先覚者、J・Y・クスター』、藤原書店。
- ヒギンズ・ダレサンドウロ、アン (2011)「正義と慈悲—廣池とコールバーグの道徳論に関する一西欧

- 人の見解』『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』、岩佐信道訳、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、168-185頁。
- 廣池千九郎 (1928/1980)『道徳科学の論文 (第1冊)』、モラロジー研究所。
- 廣池千九郎 (1905/1983)『東洋法制史研究』(所収の『東洋法制史序論』)、内田智雄校訂、創文社。
- 廣池千九郎 (1928/1985)『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文 第七冊』、モラロジー研究所。
- 廣池千九郎 (1928/1986a)『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文 第一冊』、モラロジー研究所。
- 廣池千九郎 (1928/1986b)『新科学としてのモラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文 第九冊』、モラロジー研究所。
- ポール、ロバート (1989)「モラロジーとイギリスの衡平法体系」『廣池千九郎没後五十年記念論集 廣池千九郎とモラロジー』、立木教夫訳、モラロジー研究所編、広池学園出版部、449-470頁。
- ポール、ロバート・E (2019)「王位・聖人・最高道徳 (上)」『モラロジー研究』No. 82、北川治男監訳、モラロジー研究所、75-151頁。
- 松浦勝次郎 (2015)『真に意味ある生きる道—『道徳科学の論文』に学ぶ』、モラロジー研究所。
- 松村健一 (1997)「『東洋法制史』の位置付けとその『道徳科学の論文』に与えた影響について」『モラロジー研究』No. 44、モラロジー研究所、59-86頁。
- 水野治太郎 (1966)「広池博士の科学思想—学問観と方法の特色」『廣池千九郎博士生誕百年記念論文集』、道徳科学研究所研究部編、道徳科学研究所、本文 355-375頁。
- 水野治太郎 (1991)『ケアの人間学—成熟社会がひらく地平』、ゆみる出版。
- 水野治太郎 (2008)『「経国済民」の学—日本のモラルサイエンス研究ノート』、麗澤大学出版会。
- 水野治太郎 (2011)「正義を補完するケア・ケアを補完する正義—公共世界における慈悲実現の課題」『2009年モラルサイエンス国際会議報告 廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』、岩佐信道・北川治男監修、モラロジー研究所、419-440頁。
- 三瀧信吾 (1967/1973)「『日本憲法淵源論』の意義とその体系について」『生誕百年 廣池博士記念論集 増補版』、内田智雄編、広池学園事業部、441-488頁。
- モラロジー研究所編 (2007)『総合人間学モラロジー概論—互敬の世紀をひらく道徳原理』、モラロジー研究所。
- モラロジー研究所編 (2009/2015)『改訂 テキスト モラロジー概論』、モラロジー研究所。
- 欧文
- Caney, Simon (2005), *Justice Beyond Borders: A Global Political Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Frechette, K. S. Shrader (1981), 'Technology, the Environment, and Intergenerational Equity', in her (ed.) *Environmental Ethics*, California: The Boxwood Press, pp. 67-80 (「テクノロジー・環境・世代間の公平」『環境の倫理』上巻、フレチェット、シュレーダー編・京都生命倫理研究会訳、晃洋書房、1993年、119-145頁)。
- Gilligan, Carol (1982), *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press (『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』、生田久美子・並木美智子訳、川島書店、1986年)。
- Higgins-D'Alessandro, Ann (2013), 'Justice and Benevolence: A Westerner's Perspective on the Views of Chikuro Hiroike and Lawrence Kohlberg', *Studies in Moralogy No. 70*, Chiba: The Institute of Moralogy, horizontal typesetting pp. 21-32.
- Hiroike, Chikuro (1928/1934/2002), *Towards Supreme Morality: An Attempt to Establish The New Science of Moralogy; vol. 1, 'Forward to the Translation'* by Mototaka Hiroike, Chiba: The Institute of Moralogy.
- Jonas, Hans (1979/2003), *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische*

- Zivilisation*, Berlin: Suhrkamp Taschenbuch (『責任という原理—科学技術文明のための倫理学の試み』、加藤尚武監訳、東信堂、新装版、2010年)。
- Jonas, Hans (1984), *The Imperative of Responsibility: In Search of an Ethics for the Technological Age*, trans. by Hans Jonas with the Collaboration of David Herr, Chicago: The University of Chicago Press.
- Mizuno, Jitaro (2013), 'Care and Justice Counterpoised: The Key to Realizing Benevolence in the Public World', *Studies in Moralogy No. 70*, translated by Shujiro Mizuno, Chiba: The Institute of Moralogy, horizontal typesetting pp. 193–207.
- Nozick, Robert (1974), *Anarchy, State, and Utopia*, New York: Basic Books (『アナーキー・国家・ユートピア—国家の正当性とその限界』、嶋津格訳、1995年)。
- Rawls, John (1971/1999), *A Theory of Justice*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, revised edition (『正義論 改訂版』、川本隆史 [ほか] 訳、紀伊國屋書店、2010年)。
- Sandel, Michael (2005), *Public Philosophy: Essays on Morality in Politics*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press (『公共哲学』、鬼澤忍訳、筑摩書房 [ちくま学芸文庫]、2011年)。
- Sandel, Michael (2009), *Justice: What's the Right Thing to Do?*, New York: Farrar, Straus and Giroux (『これからの「正義」の話をしよう』、鬼澤忍訳、早川書房 [ハヤカワ・ノンフィクション文庫]、2011年)。
- Sarat, Austin ed. (2014), *Intergenerational Justice*, New York: The International Debate Education Association.
- Tan, Kok-Chor (2004), *Justice without Borders: Cosmopolitanism, Nationalism and Patriotism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tremmel, Joerg Chet (2009/2014), *A Theory of Intergenerational Justice*, New York and London: Routledge, paperback edition.

(キーワード：廣池千九郎、正義、慈悲、最高道徳の基礎的観念、正義と慈悲の調和、東洋法制史研究、日本皇室・聖人研究)